

「役に立つ」という喜び



NEW MORALS

私たちは、
毎日のような心で暮らし、
どのような心で
人に接しているでしょうか。
ニューモラルは、
人としての行いととも
そのもととなる
心のあり方（心づかい・考え方）を
大切にするモラルです。

この小さな月刊誌
『ニューモラル』は、
創刊（昭和四十四年九月）以来、
心豊かな人生、楽しい家庭、
明るい職場、住みよい社会を
つくるための心づかいと行いの
あり方を提唱しています。

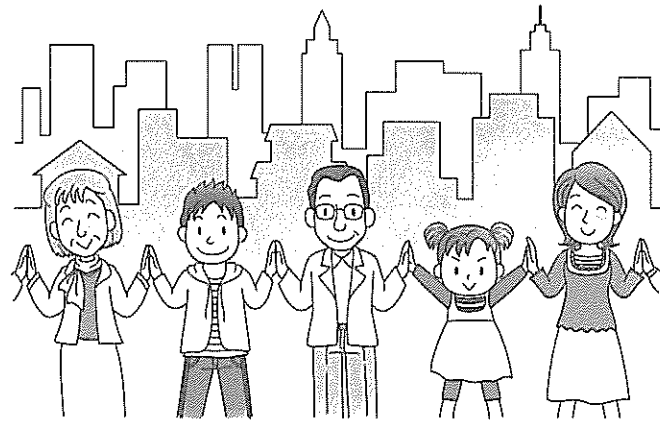
目次

「役に立つ」という喜び.....	3
心づかいQ&A.....	16
あなたからのおたより.....	18
「モラロジー生涯学習セミナー」6月のご案内.....	20

私たちの生活は、居住する地域の自治会活動をはじめとして、有志の力に支えられている部分も少なくありません。また「他人や社会の役に立ちたい」「社会の中で自分の居場所を見つけない」といった思いから、ボランティア活動やNPO法人（特定非営利活動法人）の事業などに携わる人もいます。

しかし「人の役に立ちたい」という純粋な思いを持って、みずから進んで始めた活動であっても、続けていくうちに疑問や不満が生じることもあります。

今月は、町内会の役員を引き受けた会社員の体験から、社会貢献に携わる際の心を見つめ直します。



町内会の役員を引き受けて

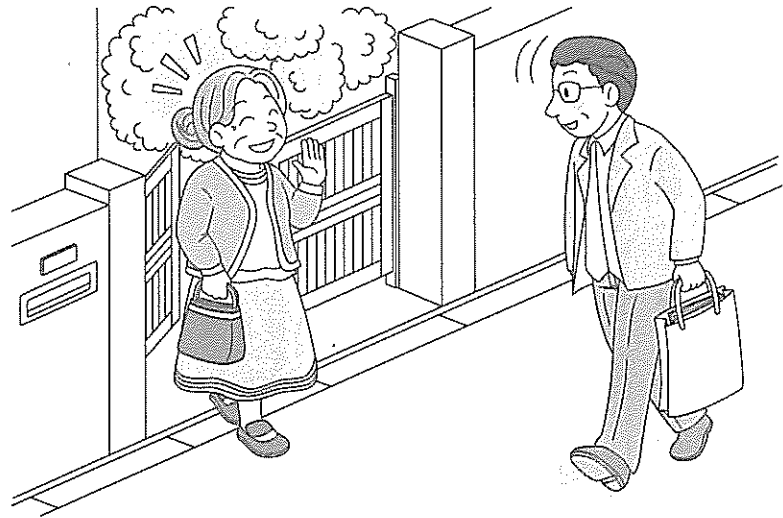
「実はもう一期、町内会長を務めることになりました……。村田さんも役員になつてもらえると、助かるのですが」

会社員の村田さん（48歳）が、隣に住む中野さん（68歳）からこんな誘いを受けたのは、年度末のことでした。

都市近郊にあるこの町内会では、約五百世帯が暮らしています。役員は自営業の人や定年退職した人が多いものの、中野さん自身も会社勤めをしていることから活動に携わってきたということですが、

村田さんは少し迷いましたが、五年前にここへ越してきて以来、家族ぐるみでお世話になつている中野さんの頼みでもあり、「仕事に支障のない範囲でなら」と、思い切つて引き受けることにしました。

活動への参加は、月に一度の役員会に出席することから始まりました。当初は勝手が分からず、戸惑うこともありましたが、ほかの役員とも親しくなるにつれて、だんだん楽しくなってきました。一年の間には、夏祭りや防災訓練、餅



つき大会など、さまざまな行事があります。そうした機会に案内チラシをつくる役割を買って出たところ、中野会長や先輩役員に喜ばれ、二年目からは文書作成等の事務を手伝うことになりました。

ある日曜日、村田さんは書類配布のために町内を回っていました。近所の家の郵便受けに書類を入れようとしたとき、たまたま家から出てきた年配の女性が、笑顔でこう言いました。

「ありがとうございます。いつもお世話さまです」

村田さんは「町の人たちの役に立っている」ということを実感し、これまでに感じたことのない充実感を味わっていました。

いわれのない叱責

村田さんが役員になって一年半が経過した、ある土曜日の夜のことです。町内会の役員のほか、各地区で班長を務める三十数名が集まって、町内会費の集金についての確認の場が設けられました。

年二回に分けて行う町内会費の集金の際は、各地区の班長に協力を求めます。そのため、毎回最新の世帯名簿に基づいて、役員と各班長との確認を行うのです。文書作成を任されている村田さんは、前任者から引き継いだ前年の名簿に

転入・転出等の情報を反映させ、新しい名簿をつくって会合に臨みました。

会合が終わり、出席者のほとんどが席を立った後のことです。班長の一人である年配の男性が、こう言いました。

「この名簿は誰がつくったのかね？ 前回訂正を頼んだところが、まだ直っていないじゃないか」

不機嫌そうな声に慌てた村田さんは、駆け寄って事情を尋ねます。

「私ですが……訂正のご指示は、いつ、

どなたにおつしやつたのでしょうか？」
聞けば、この男性が担当する班内の一軒について、数年来、名前が間違つたまま名簿が引き継がれていたようです。男性が班長になった際、間違いに気づいて近隣の役員に知らせたものの、役員間の連絡ミスで、今年から名簿づくりを担当することになった村田さんにまで情報が届かなかつたことが分かりました。
運の悪いことに、男性が一報を入れたという役員は、仕事の都合でその日の会合を欠席していました。中野会長は、別の役員と話し込んでいる最中です。
「名簿は大切なものなんだから、しっかりとやってもらわないと困る」
男性の言い分はもつともながら、身に



覚えのないことを強い口調で責め立てられた村田さんは、心穏やかではありません。役員の一人として謝り、訂正した名簿を男性の自宅へ届けることを約束しつつも、内心ではこう思うのでした。
「こつちだつて忙しい中、ボランティアでやっているのに……」

貧乏くじを引かされた？

翌日、村田さんは訂正した名簿を持って、男性の自宅へと向かいました。
叱責を受けた相手のところへ行くのですから、村田さんの足取りは自然と重くなります。心の中は、貧乏くじを引かされたような思いでいっぱいです。

「自分はせっつかくの休日も、地域のために働いているのに……。役員以外の人には、清掃奉仕への参加を呼びかけてもなかなか集まらないのに、苦情だけは言うんだから、たまつたものじゃないよ」

表札を確認して呼び鈴を押すと、昨晩の男性が出てきました。あらためてお詫びの言葉を述べると、男性はひと言、こう言つて名簿を受け取りました。

「早速ありがとう。役員はいろいろ大変だと思ふけど、頑張つて」

重ねての叱責がなかったことは幸いでしたが、村田さんには、その男性の態度がそつけないものに感じられました。

このことをぎつかけに、村田さんの心の中には、町内会の役割に対する小さな

疑問や不満が生じるようになりました。すると、以前は楽しく取り組んでいた活動すら面倒に思えてきます。しかし、無

責任に投げ出すわけにもいきません。充実感はいつの間になくなり、義務感だけで働いているようなものでした。



心の底にあった気持ち

「村田さん、最近忙しいの？ 仕事が大変なときは、町内会のことは無理をしなくても大丈夫だよ」

それから数週間が経った、ある日のことです。役員会からの帰り道、村田さんは先輩役員の佐藤さん（55歳）から、こんな言葉をかけられました。

役員の中でも比較的年齢の近い佐藤さんの温かいひと言に、村田さんは先日の名簿の一件以来のもやもやとした思いを打ち明けました。

佐藤さんは「それは災難だったね」と言って、話に耳を傾けてくれました。そして、村田さんがひととおり話し終わると、穏やかにこう言いました。

「名簿のことで苦情を言ったという男性は、村田さんが越してくる前に町内会長を務めていた人なんだよ。だから、役員の大変さは誰よりも知っていると思う。むしろ町内でいろいろな問題を抱えていた時期だから、住民の意見をまとめるのにずいぶん苦労をされたはずだよ」

村田さんはその話を、意外な思いで聞きました。佐藤さんは続けて言います。

「僕も初めは、町のためになるのだったら」と思っただけで、役員を引き受けたけれど、褒められればうれし、苦情を受けたら、なぜこんなことを言われなくちゃいけないんだ」と思うこともあるよ。一生懸命になればなるほど、協力的ではない人たちが腹立たしく思えてくるしね。

でも、そんな自分の心を見つめてみると、人からよく思われたい”とか、これだけやっているのだから、感謝されて当然だ”という思いがあるような気がするんだ。そういう思いを取り除いて、純粹に、町のために”という思いに立ち戻ることができたら、もつと気持ちよく働ける

「奉仕」の後ろ姿

数日後の朝、村田さんが出張のため、いつもより早く家を出たときのことです。交通量の多い交差点に差し掛かると、横断歩道の手前で一人の男性が黄色い旗を持って、小学生を誘導しています。何気なくその人の顔を見ると、元町内会長であるという、あの男性でした。

村田さんは驚きながらも挨拶します。

「おはようございます。町内会の村田です。先日は失礼しました。早朝から大変ですね」

るのかもしれないけれど……僕もまあ、なかなかできないんだだけだね」

そう言っただけで笑う佐藤さんと話しているうちに、村田さんは心のわだかまりが少しほぐれたような気がしました。



すると、男性はなんでもないことのように、こう言いました。

「好きでやっていることだから、全然大変ではないよ。健康にもいいしね」

その様子からは、男性が本当に喜んでこの取り組みを続けていることが伝わってきます。村田さんは先日の佐藤さんとの会話を思い出して、考えました。

「役割として当てられたわけでもないだろうに、この男性は奉仕をいつから続けているのだろうか……。それに引き替

え、最近の自分はどうかだろう。いいことをしているつもりでいても、心の中は不満でいっぱいじゃないか”

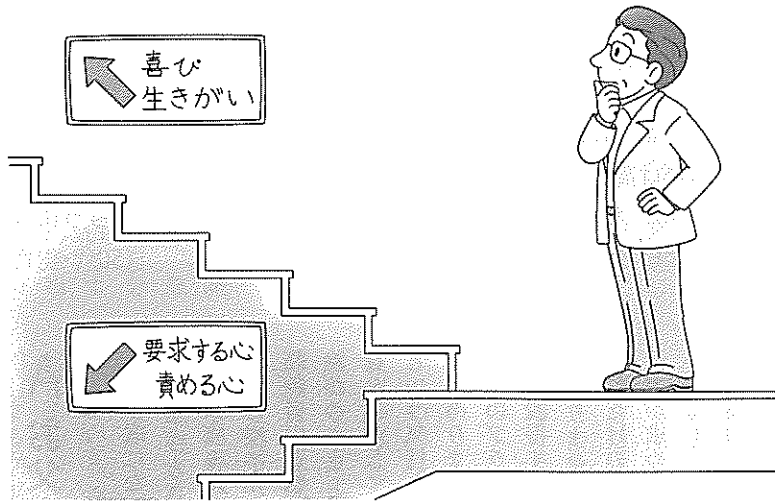
村田さんは、以前は自分にも、町の人たちの役に立つこと自体を喜ぶ気持ちが

あったのを思い出していました。また、こうした無償の奉仕で地域を支える人の存在を、役員になって初めて意識するようになったことも……。そして、自分も初心に戻ってみよう”と思うのでした。

「もういい」を「もういい」で

「言うは易く、行うは難し」という言葉があります。しかし本当に難しいのは、物事を行う際の「心づかい」なのかもしれません。

「他人や社会の役に立ちたい」という思いから、社会貢献に取り組むのは尊いことです。しかし活動を続けるうちに、周囲の評価を求めたり、手伝おうとしない



人を責めたりする気持ちが湧き起こることもあるのではないだろうか。そうしたときは「人の役に立つ」ということ自体が私たちの心に与えてくれる喜びを、あらためて見つめ直したいものです。

人は「誰かの役に立っている」ということを実感したとき、生きがいを感じます。それは「周囲とのふれあいを喜ぶ気持ち」から生まれるものでしょう。また、みずから人のために働くことを経験してこそ、「見えないところで人や社会を支える誰かの力」に気づく力が養われるのではないのでしょうか。

「よいこと」を気持ちよく、純粹な「よい心」で——その実践が、私たちを人間的に大きく成長させてくれるのです。